平成30年度

入学試験問題

帰国生

国語

1　問題用紙は監督者（かんとくしゃ）の指示があるまでは開いてはいけません。

2　開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。

3　答えはすべて解答用紙に記入して下さい。

4　記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点（くとうてん）や符号（ふごう）は一字として数えるものとします。

5　問題は1ページから15ページまであります。

受験番号		氏名	

森村学園中等部

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

よく老若男女といいますが、世代をいちばんよく表わしているのはことばです。考えかたや価値観よりも、世代間のちがいがはっきりと表われる。親子のあいだでことばが通じないとか、若者が使っていることばがわからないとか、よくいいますね。

今は男女間でことばのちがいがなくなって、むしろ世代間のちがいが鮮明にことばに表われてくる。世代によって、どういうことばがもっともつながらないかというと、やはり感情を表わすことばなんです。新聞記事などに出てくることばは学校で習えばいいからとくに問題ない。問題になるのは感情語、平たくいえば、喜怒哀楽語なんです。

そのなかでも、①喜ぶときのことば、「うれしい」「楽しい」というのは、世代間であまり変わらない。うれしいときは「うれしい」で通じるし、楽しいときは「楽しい」、それだけでいい。他にことばがあまりないんです。

［　Ⅰ　］、悲しいときと怒るとき、これには世代間のちがいがいちばんよく表われる。

［　Ⅱ　］、「怒る」というのはどういうことか。バカにされたとか、母親の言うことが気にくわないとか、新聞に載ってる*汚職のことだとか、原子力事故だとか、どうしてこんなことが世間にあるんだろうと自分のこころのなかに怒りが出てくるでしょう。この怒りを表現することばが、世代間ではっきりと分かれている。

②十代ならば「むかつく」、三十、四十代ならば「頭にくる」、六十代以上になると「腹がたつ」という。このように世代がきれいに分かれる。あなたはいったい、「腹がたつ」派、それとも「頭にくる」派、それとも「むかつく」派、そのどれですか？　それによって世代がわかりますね。

ここでまず大切なことなんですが、「腹がたつ」といういいかたは年をとった人が急にいうようになったわけではない。今、六十歳、七十歳の人たちが怒ったときは、子どものときから「腹がたつ」といっていた。それから、三十代、四十代の人たちは、子どものときから「頭にくる」といっていた。ところが、世代が代わって、十代、二十代になると「むかつく」という。今の若い人たちが年をとっても「むかつく」というようになるかどうかはわかりませんが、わたしの世代は子どもの頃から「頭にくる」とか「むかつく」ということばは使わなかった。

これらの表現のちがいについて考えてみると、「腹がたつ」は、怒りがおなかにたまってむしゃくしゃする、それがこみあげる、*いきどおるのです。「頭にくる」は、怒りが頭にカチンとくること。だけど、「むかつく」は、どんな感じで怒っているのか、ちょっとわたしにはわからない。

Ⅲ 大きなちがいは、怒りとかいきどおるといった同じ感情を表わすことばのなかに、「腹がたつ」と「頭にくる」はいずれもからだの名称が入っている。ところが、「むかつく」は腹も頭もなにも入っていない！

つまり、「腹がたつ」は、怒りがいったんからだの、しかもおなかにくるんです。おなかまでいき、そこでむしゃくしゃする。つぎに「頭にくる」は、いったん頭までくる。頭まできて、そこでカチンとくるわけ。おなかまでくるのと頭にくるのとでは、距離的にはおなかの方が長いんです。居座っている面積も広いから、それだけ留まる時間も長い。「頭にくる」は距離も短いし、居座る時間も短い。

（中略）

先日、新聞に「むかつくのは、いったいどういうときか」というアンケートが載っていた。これは小学生から大学生までを対象におこなわれたものです。たとえば「太ったと言われてむかついた」とか。この場合はまだ原因があります。

それから「トイレットペーパーがないのでむかつく」。あるいは「雨の日でむかつく」とか。どうしてトイレットペーパーがないだけで、雨の日だというだけで、むかつくのか、こちらが考えてしまう。

紙面の見出しには「やり場のない、瞬間の」とあり、そのつぎに「吐き気」と書いてあるんです。そこで思うんですが、「腹がたつ」とか「頭にくる」は③からだことばの慣用語といってもいい。でも、「むかつく」はからだ語が入ってない。だから、あえていえば、からだが抜けているから生理語ではないか。

そこで生理語ということで考えてみると、「むかつく」という表現はもともと「おなかがむかつく」とか、「胸がむかつく」と使っていたんです。おなかのなかがむかついて吐き気がするという生理や病理ですね。だから「さしこむ」とか「つかえる」と同じ意味の生理語だった。

④これも、ある女性編集者から聞いた実話なんですが、彼女の六、七歳の子どもが「むかつく」といったのを、たまたまやってきていたおばあちゃんが聞いて、腹薬を出して、その子に飲ませようとしたというのです。

（中略）

この生理語だった「むかつく」が、怒りを表現することば、あえていえば感覚語になってしまった。

問題はここからなんですが、「腹がたつ」「頭にくる」は、きちんとからだのなかに入り、ある一定時間そのことについて考えて、怒りを受けとめていた。「腹がたつ」にくらべると「頭にくる」ときは、時間的には短いけれども、いったんはからだに入っていた。

ところが、「むかつく」は全然からだに入っていない。それは相手と自分とのあいだが「切れてる」ということなんです。関係が*遮断されている。そういう他者とのあいだが、いろんなかたちで「切れて」しまっているからこそ、今日よくいわれる「キレる」ような行動様式になっていくんではないでしょうか。

つまり、「キレる」のは突然爆発するというけれど、本当にそういっていいのか。それまでじっと我慢してたのかというと、そうではない。つまり、少年、少女が「キレる」、父親も母親も「キレる」し、夫も妻も「キレる」。日本人全体がそういう状態になっている。おそらく社会環境的に「キレる」状態になっているんじゃないか。「むかつく」と「キレる」は*不即不離のことばですね。

でも、「腹がたつ」や「頭にくる」くらいまでは、「キレる」ところまでいかなかった。つまり、突発的にそういう状態までいってしまうわけではない。⑤そこへいたるあいだに、親子喧嘩をしたり、夫婦喧嘩をしたわけです。

「頭にくる」時代には、親子や夫婦でのやりとりは少なくなってきているんだけど、⑥お互い同士の表情などを通して、なんらかのコミュニケーションはあった。

（中略）

先ほど「腹がたつ」とおなかが痛くなるとか、「頭にくる」と頭が痛くなるとかいいましたが、どれも別のことばでいい換えれば、「こころ」なんです。「腹がたつ」といえば、こころが裂けるような思いがしたわけです。そういうことを胸とか腹とか頭で表現しているわけですね。ここが大切なところです。

だから、「むかつく」がからだことばが入っていないということは、こころと離れたものになってしまったことです。こころとは関係ない、まったく反射的なもので、からだのなかに、つまりこころのなかに入ってこないものになってしまった。

⑦からだことばの大切なことは、からだというだけではない。「胸が騒ぐ」ということは、こころが騒ぐことです。だから、からだことばは、からだの部位でこころを表現することによって、からだ全体で受けとめ、からだとこころを表現していたのです。

（立川昭二『からだことば』より）

※　問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

（注）＊汚職……政治家や公務員などがその地位や職務を利用して不正を行うこと。
＊いきどおる……うらみやいかりの気持ちをいだく。
＊遮断……流れているものをさえぎりとめること。
＊不即不離……付かずはなれずの関係にあること。

問一 ――①「喜ぶときのことば、『うれしい』『楽しい』というのは、世代間であまり変わらない」とありますが、世代間で変わらないのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「うれしい」や「楽しい」という感情をあらわすことばはそれほど多くの表現方法がないから。
イ 「うれしい」や「楽しい」という感情はどの年齢でも感じ方にそれほど差がないから。
ウ 「うれしい」や「楽しい」という表現は「悲しい」「怒る」という表現よりもよく使うから。
エ 「うれしい」や「楽しい」という感情は世代間よりも男女の性差により表現方法が異なることばだから。

問二 [Ⅰ]から[Ⅲ]にあてはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さらに　**イ** つまり　**ウ** ところが　**エ** たとえば　**オ** あるいは

問三 ――②「十代ならば『むかつく』、三十、四十代ならば『頭にくる』、六十代以上になると『腹がたつ』という」とありますが、『腹がたつ』・「頭にくる」と「むかつく」の違いについて述べたものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「腹がたつ」や「頭にくる」は年配の人が子どものころから使ってきた表現であるが、「むかつく」は若い世代が年をとってからも使う表現である。

イ 「腹がたつ」や「頭にくる」はからだの部位を使った生理的な表現であるが、「むかつく」はからだの部位が使われていない感覚的な表現である。

ウ 「腹がたつ」や「頭にくる」は体内から怒りが沸き起こっていることを表すが、「むかつく」はどこで怒りの感情が起こっているかわからない表現である。

エ 「腹がたつ」や「頭にくる」はいったん怒りを体で受け止めているが、「むかつく」はからだの中を経由せず、瞬間的に沸き起こる感情を表す表現である。

問四 ――③「からだことばの慣用語」とありますが、この慣用語として**適当でないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生の忠告はぼくにとって耳の痛い話だ。

イ 無断欠勤が続いて、彼は会社を首になってしまった。

ウ 今年も私はコンクールで入賞し、母は鼻が高い。

エ 同じ姿勢で長い時間勉強していたら、肩が凝った。

問五 ――④「これも、ある女性編集者から聞いた実話なんですが」とありますが、筆者がこの「実話」を紹介(しょうかい)した意図を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おばあさんのような年寄りは、現代の言葉の使い方にはついていけないということを読者に示そうとしている。

イ 六、七歳(しちさい)の子どもと年寄りとでは、言葉への感覚が大きく異なるということを読者に伝えようとしている。

ウ 「むかつく」という表現が感覚を表す言葉ではなく、本来は生理語であったということを読者に示そうとしている。

エ 年寄りの「むかつく」のとらえ方こそが正しく、子どもの用法は誤っていることを読者に確認しようとしている。

問六 ――⑤「そこ」が指す内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「腹がたつ」状態

イ 「頭にくる」状態

ウ 「むかつく」状態

エ 「キレる」状態

問七 ――⑥「お互(たが)い同士の表情などを通して、なんらかのコミュニケーションはあった」とありますが、このコミュニケーションの具体例として**適当でないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不機嫌(ふきげん)そうにしている妻の様子を見て、それとなく夫が家事を手伝った。

イ どれだけ自分が嫌(いや)な思いをしたかを、弟が涙(なみだ)ながらに説明した。

ウ 泣き出しそうな顔をしている妹を見て、姉はけんかをやめた。

エ 自分が怒っていることを親にわからせようと、子どもがふくれ面(つら)をした。

問八 ――⑦「からだことばの大切なことは、からだというだけではない」とありますが、筆者が「からだことば」を「大切」だとのべるのはなぜですか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問九 つぎの文章は同じ文章の中で「血」という文字を使って筆者が説明している文章です。筆者の「からだことばを大切にしたい」という考えをふまえると、この文章の続きとして「血」を使ってどのような熟語を考えてほしいと筆者があげていると考えられますか。思いつく熟語を二つ挙げなさい。

私は(大学の)授業の時、からだにまつわることばについて学生たちに質問するのです。

たとえば、「血」という字を使って、きみたちが知っていることばを書いてごらんなさいというんです。「血」は人間のいのちにとって大切なものです。だから、黒板に大きく「血」と書き、「血」という字に漢字を加えて二語か三語にして、「血」が含(ふく)まれたことばを挙げるようにいうんです。「血」でいいますと、すぐ出てくるのが「血液」「血管」「血液型」、それから「輸血」「血糖値(けっとうち)」が出ます。ところが、だいたい五つくらいで止まってしまう。

しかも、今出てきたことばは、どれも医学用語なんです。わたしたちは「血圧」とか「血液型」といった医学用語を、そのまま日常的によく使っている。だから、ふつうの人たちも「血」と聞いて何を想起するかというと、まず「血圧」とか「血糖値」が出てきてしまう。そこが問題なんです。じつはわたしが、学生に「血」が含まれたことばでいちばん書いてもらいたい大切なことばは、それとはちがうことばです。たとえば……。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

朝もこの時間になるとラッシュの頂点を外れて、息も出来ない程の混みようではない。しかし、一様に座席は埋まり、つり革の数以上の乗客が乗っている。四月の車内では、自身の殻の中でそれぞれの思いを抱いて、周囲との間に見えない壁がある。その壁は無理やり入ってくるもの、例えば子供の泣き声、例えばイヤホンから漏れて響く音楽などを拒絶する。

中学三年生の佳織は、出がけの母の一言に、イライラしていた。

「少しは自分のことは自分でしなさいよ。制服は脱ぎっぱなし、お弁当箱は流しに放りっぱなし、ぱなしぱなしばっかりで、自分の要求ばかり主張して。」

確かに、言われることはごもっともなのだが、出かける直前に言うことではない。せっかくの晴れた朝のスタートに、シミがついたようだ。ぴょんとはねた寝癖まで自分の思い通りにならないことが腹立たしかった。

「みんなの家ではお弁当箱はお母さんが洗ってくれるって。なんでうちは私がやらなくちゃいけないのよ。」

わかってはいるけれど、佳織が売り言葉に買い言葉で返せば、

「みんなって誰よ。二人か三人をみんなって言うのはよしなさい。自分のお弁当箱でしょ。」

と、母から追い打ちをかけられる。特別厳しい母ではないが、自分の主義は曲げない人である。でも、①朝の出がけの会話にそれを選ばなくてもいいじゃないか。さっきから後ろに立つ男子高校生の大型のバッグが背中にごりごりと当たって痛い。佳織は思いっきり体を左右に振って、無言の抗議をする。男子高校生はチッと舌打ちをして位置を変えた。②やってやったという満足も時間が経てばむなしくなる。

二メートル程向こうのつり革につかまっている、自分と同年代位の制服姿の女の子が、しきりにはねた前髪を押さえつけている。さっきから、ハオランはそのしぐさが気になっていた。ハオランは、日本を家族と旅行している。父と母、兄と姉、祖父、そして叔父家族も一緒だ。ハオランはこの旅を始めて気づいたことがある。日本の電車は静かだ。乗客は自分の世界にひたっているが、会話をするにしても小声で話す。自分の国の車内はそれぞれが他人を気にせず、多数の声で満ちている。ハオランの家族はいつものように話していたが、周囲から集まる視線に③ハオランは居心地の

悪さを感じていた。ごく当たり前だと思っていたこともほかの国では全く違うことを肌でかんじていた。

「ホテルの朝食、あなた、食べきれないほどお皿に盛って。」

「金を払っているんだから、どれだけ取っても文句を言われる筋合いはなかろうさ。」

「あの果物、美味しかったね。よく冷えていて。」

大して中身のない会話である。ハオランは今また、この電車の中でそこだけ異次元の世界があって、眼に見えない壁が自分たちを囲んでいるように思えた。

「なあ、もう少し静かにしろよ。」

そうは言ってみたが、家族は何が問題になっているのか知ろうともしない様子だった。大きな声の会話が続く。あの女の子がちらりとこちらを見て、眉をしかめた。④ハオランは我知らず頬が赤らんだ。

小学生から中学生になり、数馬は受験に合格して、初めての電車通学となった。半ズボンから長ズボンへの変化に慣れるのも時間がかかりそうだ。初めは、早めの電車に乗り、カバンから手を離してもそのままカバンがそこにある、という人の密集度に閉口した。乗る電車をおくらせても、数馬は体以上に心に疲労を溜めていた。新しい学校の、新しいクラス、新しい友達作り。どちらかと言えば引っ込み思案の性格である。加えて、ここ数年は受験塾での時間が長く、友達作りを避けていた。話しかけられることを待っているうちに、クラスの中でぽつりと一人でいることが当たり前になってしまった。ようやく自分から話しかけることを意識したのだが、もういくつの、⑤柔らかいが、隙入る余地もない拒絶に会ったことだろうか。休み時間になるのが数馬は苦痛になっていた。⑥にぎやかで明るい声が響く休み時間は、いつしか数馬には気の重いものとなっていた。

つり革に手を掛けることもせず、その若者はノートパソコンの画面を指先で動かしていた。電車がカーブにさしかかる度、持ちにくいパソコンの位置を動かし、両足に力を入れて踏ん張っている。紺色のスーツに、白とスカイブルーのネクタイがいかにも新入社員の趣である。眉間に少し皺を寄せて、食い入るように画面を見つめる眼が右に左に、上に下にとせわしなく動く。画面上の文字をなぞるように唇が動くが声にはならない。島田亮太は、昼からの*プレゼンに向けて必死だった。入社して初めてのプレゼンである。自分が出来る男であることを是が非でも印象づけたい。昨夜、いや正確には今朝までかけて作った*パワーポイントをチェックする。また電車がカーブにかかる。体のバランスが崩れそうになり、脚に力

が入る。

島田亮太の前に座って、そんな様子を先刻からにこにこと見上げていた河野ひさは、背筋のしゃんと伸びた白髪の老女である。自分の孫よりも若いであろう青年が、何をしているのか、ひさは察するだけの知識は持っている。

「ねぇ、あなた。それ、持ちながら仕事するの、大変でしょう。」

「えっ。」

突然声を掛けられたのが、一瞬自分のことかといぶかりながら、島田亮太は目の前に座る老女が自分のことをまっすぐに見上げているのに気づいた。

「ここ、お座りなさい。座ってお仕事した方がはかどるわよ。」

「そんな、ご老人に席を譲っていただくなんて。」

二人の間にかわされる会話は、周囲の乗客の耳目を集めるに十分な出来事だった。しかし、ひさはそんなことにはおかまいなく、すっくと立ち上がると、

「いいのよ。いつも若い人に席を譲られるばかりで、⑦たまには譲る側になってみたいのよ。ほら、お掛けなさい。」

と言った。ひさの口調は柔らかかったが、*毅然とした強さがあった。島田亮太は、その言いように素直に従ってしまっていた。

「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて。あっ、居眠りしないように気をつけますね。」

島田亮太は座席に腰を下ろすと、パソコンの画面に視線を落とした。ひさはつり革に手をかけ、車窓を流れる景色に目をやっていた。老女と若者のやり取りを、見るともなく、聞くともなく窺っていた乗客に柔らかい空気が広がった。

その時である。車内アナウンスが告げた。

「乗客の皆さま、間もなくトンネルを抜けるとお濠が見えてきます。桜の花が満開です。」

いつにない車内アナウンスは車掌の思いつきだろうか。さまざまな思いを抱いて、この電車に乗っていた乗客の眼が一斉に車窓に向けられる。少し長めのトンネルを抜けると、お濠の土手に植えられた桜の大木の連なりが、薄桃色の花弁を*満艦飾のように掘り割りの上に垂れていた。

「おお」

と、車内のいたるところから声があがる。

「綺麗！」

佳織はお濠沿いに続く桜の屏風を見ているうちに、心に刺さった棘が溶けていくように思えた。本当にささいな、どうでもいいことに腹を立てていた自分が見えてきたのだ。馬鹿みたい、ふっと唇の両端が上がる。

ハオランは、車内に生まれたどよめきにつられて車窓に眼をやった。

「みんな、見て。桜だ。日本の春だ。」

おしゃべりをしていたハオランの家族の視線が車窓に向けられる。ぴたりとおしゃべりが止まる。さっき冷たい視線をこちらに向けていた制服姿の女の子が、ハオランを見て、にこっと笑顔になる。ハオランも笑顔を返す。

数馬は久しぶりに顔を上げたような気がした。思えば、ここしばらくうつむいてばかりいたような気がする。顔を上げるとは、こんなに気持ちが晴れ晴れするものなのだろうか。

「いい眺めね。あなたに席を譲ったおかげで、窓いっぱいに桜を見られるわ。」

ひさは、春の陽射しに輝く桜のたたずまいに眼を細めて、島田亮太に視線を向ける。パソコンを持ったまま、首だけ後ろに向けていた亮太が、笑顔を返す。

「そう言っていただくと、⑧僕もちょっと嬉しくなります。」

満開の桜がお濠の水面に花びらを散らすまでにはまだしばらくありそうだ。「トンネルを抜けると、桜の花が満開です。」と告げる車掌のアナウンスもまだしばらくは続きそうである。

（本校国語科教諭による書き下ろし『トンネルを抜けると』）

（注）＊プレゼン……プレゼンテーションの略。あることに関して多数の前で提案すること。
＊パワーポイント…プレゼンテーションのための道具。
＊毅然……意志が強く、他からは動かされない様子。
＊満艦飾……船が、旗や電灯などで艦全体を飾ること。

問一 ――①「朝の出がけの会話にそれを選ばなくてもいいじゃないか」とありますが、この会話の話題が、佳織をイライラさせたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 母と自分は別の人格のはずなのに、母が自分の主義を娘に押し付けてくるものだから。
イ 正しい主張だということは理解できるが、反論する時間のない朝には受け入れがたい話題だから。
ウ いつ話題にしてもいいことなのに、この爽やかな朝にわざわざしなくてもいいものだから。
エ 何度も何度も同じことを指摘されて、もう耳にたこが出来る程飽き飽きしている内容だから。

問二 ――②「やってやったという満足も時間が経てばむなしくなる」とありますが、佳織がむなしくなるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 常に誰かにかみついていないといられない性格の佳織には、済んだことはどうでもいいことだったから。
イ しょせん母との会話によってもたらされた「八つ当たり」の行為だったと、佳織はわかってきたから。
ウ 物事をマイナスの視点でしか見ない佳織にとって、満足という感覚は一時的なものにすぎなかったから。
エ 背中に当たるバッグの痛みがなくなれば、男子高校生に対する佳織のいきどおりもなくなってきたから。

問三 ――③「ハオランは居心地の悪さを感じていた」とありますが、ハオランだけが、「居心地の悪さ」を感じていたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ハオランだけが、自分の国とは違う、日本人のつちかってきた社会の常識や価値観を理解し始めていたから。

イ ハオランだけが、周囲に気配りができ、他人に迷惑をかけたくないというひかえめな性格の持ち主だったから。

ウ ハオランだけが、家族の会話が理解でき、今話さねばならないほど重要な内容ではないとわかっていたから。

エ ハオランだけが、言葉の通じない日本で、大して意味のない視線も意味を持っていると思ってしまったから。

問四 ――「今また」はどの言葉にかかっていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ハオランは今また、この1電車の中で2そこだけ異次元の3世界があって、眼に見えない4壁が自分たちを5囲んでいるように6思えた。

問五 ――④「ハオランは我知らず頬が赤らんだ」とありますが、ここからハオランのどのような気持ちが読み取れますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア しようがない家族だと思いながらも、家族を非難されて、自分がとがめられたように感じたことによる怒り

イ 女の子のくせに、大人を非難する態度を見せるのは、人の道に反していると教わってきたことによる反感

ウ 他国の人に見下されたようで、自分でも意識していなかった愛国心がわき上がって来たことによるくやしさ

エ 意識していた同年代の女の子から、自分の家族に対して非難の目を向けられたことによる恥ずかしさ

問六 ――⑤「柔らかいが、隙入る余地もない拒絶」とありますが、これに最も近いものを次の会話文の中から選び、記号で答えなさい。

ア いやぁ、悪い悪い。ぼくたち、多分やりたいことが違いそうだし、趣味も合わなそうだから、一緒にいてもきっとつまらないよ。

イ いやいや、困ったなぁ。どうしてもって言うのなら考えなくもないけれど、まずは、もっといろいろな人に声をかけてみてよ。

ウ ごめんな。おれたち、小学校時代からずっとこの三人でやってきたんだ。今までの、同じ話題を持っていないと話が通じないんだよね。

エ なに言ってんだよ。同じクラスメートなんだからそんな気を使わなくてもいいよ。好きな時に声をかけろよ。都合が合えばつきあうよ。

問七 ――⑥「にぎやかで明るい声が響く休み時間は、いつしか数馬には気の重いものとなっていた」とありますが、数馬にとって「休み時間」が「気の重いもの」になるのはなぜですか。三十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

問八 ――⑦「たまには譲る側になってみたいのよ」とありますが、この言葉から読み取れるひさの心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア この若い男に、自分の孫の姿を重ねて、孫のためになにかしてあげたいという祖母としての思い

イ こう見えても自分が見かけよりずっと若いのだということを周囲の人に認めさせたいという願望

ウ わざわざ若者の前に立ち、当然のように席を譲ることを強要する一般の老人に対する静かな怒り

エ 年寄りの自分に席を譲られるという、この若い男の気持ちの負担を軽くしてあげたいという配慮

問九 ――⑧「僕もちょっと嬉しくなります」とありますが、亮太が「嬉しく」なったのはなぜですか。三十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

三　次の①～⑧の――部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の――部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

① その山は特に山頂付近がケワしい。
② この島は、オンダンな気候に恵(めぐ)まれている。
③ 大物芸能人のイベントに人々がムラがる。
④ まだ若いのにカンシンねと、おばにほめられた。
⑤ その国の王は公平ムシを信条に政治を行った。
⑥ 富士山の頂上で初日の出をオガむ。
⑦ 全てにサンセイしてくれる人が、いい人ではない。
⑧ 文化祭ではエンゲキをすることになった。
⑨ 雨天時は屋内でドッジボールをする。
⑩ たんぽぽの綿毛が風に乗っている。
⑪ お湯を注ぐタイミングをまちがえた。
⑫ 生半可な気持ちではないことを先生に伝えた。